

---

# 豚

一寸木 一二三

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

豚

### 【Nコード】

N9505A

### 【作者名】

一寸木 一二三

### 【あらすじ】

人間だったはずだ。あくまでも夢でしかなかったはずなのに。

**(前書き)**

存在の不条理さに打ちひしがれてください。

夢の中で自分は一匹の豚だった。暖かい曇り空の草原でまどろんでいると、また新たに豚が現れた。自分はあえて気にすることも無くいたのだが、ふと見やるとかつかと燃えるような豚の目に会って、無性に恐ろしくなった。一度そうした目で見ると、その豚の肥え太った体や、土にまみれた醜い鼻っ面や、奇妙に先のとがった蹄がこの世の物でない存在に思われて、自分はその豚を追い払った。しかし豚は後から後から現れた。広い野原いっぱい豚どもで覆いつくされた。

追い払えば素直に消えるのだが、それよりも多くの豚がまたやって来る。

自分はまったくわけが分からなかった。

「何、天罰だよ」

豚の一匹が囁いて、蹄に蹴られて逃げていった。

「違うよ、あんなに殺したりするからさ。復讐だよ」そう呟いて、ほかの一匹は頭突きを食らった。

自分はいったい何の話なのか皆目見当も付かなかった。

「懐かしいねえ、こんな日にあたしはあなたに殺されたんだ」

自分には豚を殺した覚えなぞ無かった。しかし恐ろしさのあまり、自分は豚を追い払い続けた。

「千年前かい」

「いいや、千と十年さ」

「あたしは千と九年さ」

覚えは無いが豚どもの声を聞いてみると、確かに自分は千年前にこんな声の豚を殺した気がしてきた。生きるためどうかは知らないが、自分の手は豚の血で汚れていたのだ。

野原を覆う千年前の罪を見ながら、自分は涙を流していたが、やはり豚を追い払い続けた。

自分を取り囲む豚どもの鼻面が触れたと思ったとき、空に吸い込まれるように目が覚めた。

静かな昼の縁側で、頬を濡らしながら自分は横たわっていた。人間の体であった。

まだ寝ぼけている。ひどく喉が渴いていた。

水を飲もうと思ったが足がもつれて立つことはできなかった。仕方なく四つんばいで台所まで這っていった。

足の下で誰かの読みかけの本がいやな具合にめくれ上がった。

土間の冷たさがはだしの足裏に心地良かった。水瓶に身を乗り出して、自分は豚のように水を飲んだ。自分の重みに耐えかねて、水瓶は倒れた。

顔を上げると、水溜りに一匹の豚が映っていた。鼻面で追い払っても、その豚は消えなかった。映っているのは豚ばかりで、いったい自分はどこへいったのだろうと思った。

女中がやってきて、金切り声を上げて自分を追い払った。自分が消えると豚も消えた。

自分をはじめから豚だったのかもしれない。

(了)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9505a/>

---

豚

2010年11月23日05時58分発行